

3. 回答者の属性

3-1 年代と男女比

調査対象者としてサンプリングした者は各区100名の計1600名であったが、最終的な有効回答者は1240名であった。そこで回答者の年代と男女別に分け表3-1に示す。表中の年代別回答率は対象者のうち何パーセントが有効回答者となったかを示している。全体では男性が553名で44.6%、女性が677名で54.6%、不明（無回答）が0.8%であった。なお、この不明の数は年代か性別の少なくとも一方で回答しなかった者の人数である。以下、この様に回答を保留した者の取り扱いに関して、無回答者の数が全体の回答に殆ど影響しない、或いは無意味と思われる場合には、それらを除いた残りを分析対象の全体（100%）としてクロス集計等に用いた。

表3-1 回答者の年代構成と男女比

年代	男(人)	女(人)	計(%)	年代別回答率
12～19歳	67	78	145(11.7)	61.4 %
20～29歳	107	102	209(16.9)	66.3
30～39歳	78	135	213(17.2)	82.6
40～49歳	109	139	248(20.0)	77.4
50～59歳	94	99	193(15.6)	81.1
60～69歳	61	76	138(11.1)	93.8
70歳以上	37	48	85(6.9)	91.4
不明			10(0.8)	
計	553	677	1240(100)	
	44.6%	54.6%	不明 0.8%	

図3-1に12歳以上の横浜市民と回答者の年代構成を示す。この回答者の年代構成は、先に示した調査対象者と横浜市民ほどには似ていないが、サンプルは各年代に満遍なく広がっており、特異な偏りのないものと言えよう。横浜市民の構成と比較した回答者の特徴は、10代、20代の構成比が低めで、40代以上では高めな点である。図3-2は横浜市民と回答者の男性比を年代別に比較した図であるが、これから70歳以上を除けば全ての年代で回答者の男性割合が横浜市民の割合に比べて低い結果であった。特に働き盛りで多忙と思われる30代・40代で低めなのが目立つ。そ

れだけ女性の回答割合が多くなる訳であるが、図3-3に示した回答者の年代別男女比からも明らかである。

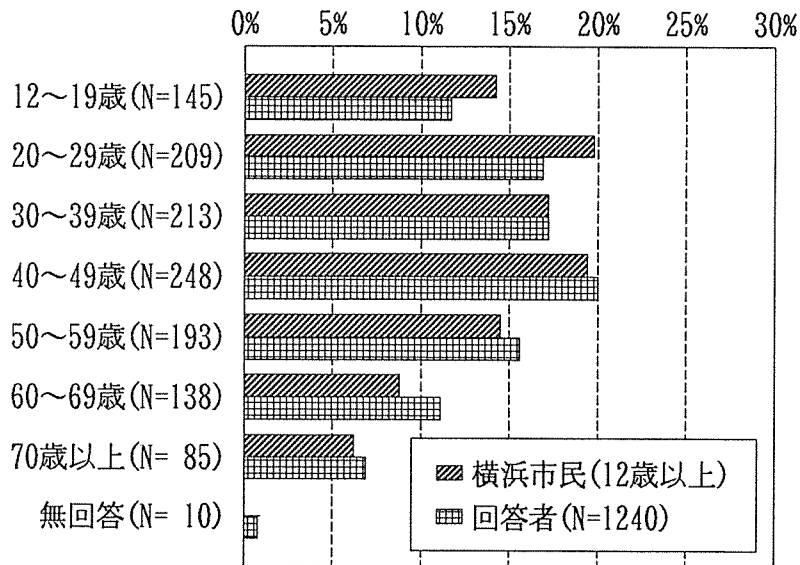


図3-1 横浜市民(12歳以上=100%)と回答者(N=1240)の構成比較

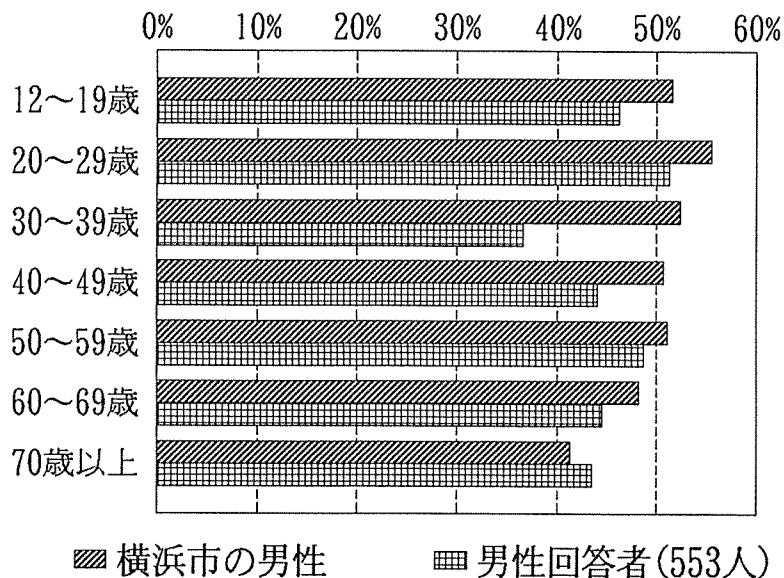


図3-2 回答者の年代別男性割合と横浜市との比較

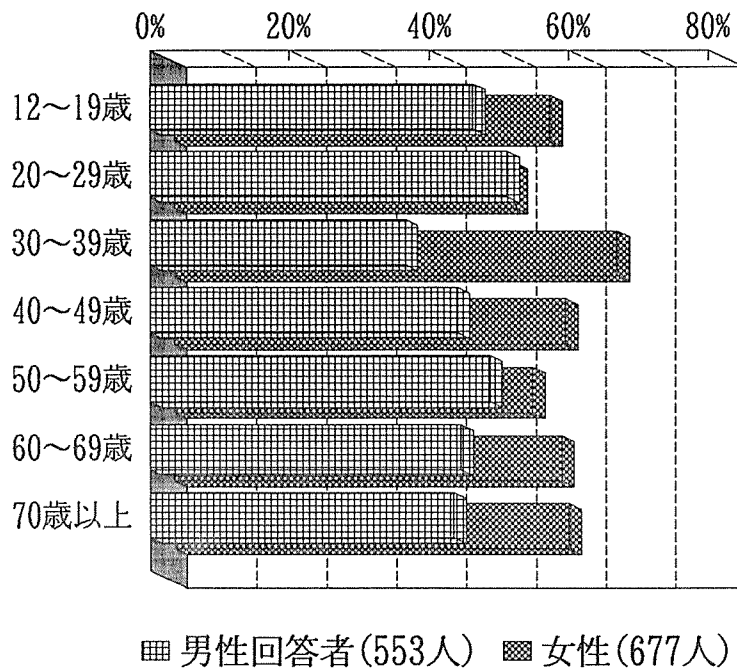


図3-3 回答者の年代別男女比

以上のことから、第1に若者それも特に10代の回答者の割合が低い。これには子供に届けられた調査票に親が回答した可能性が十分に考えられることと、若年者はこの種の問題に関心が低いことや時間的余裕が無かったこと等が考えられる。第2に、30代・40代の男性の回答率が低い理由として、多忙で回答しなかったことに併せて、代わりに家人が回答したのではと想像される。しかし回答者の年齢構成や男女構成からみて、回答者の意見はほぼ横浜市民を代表していると考えて問題は無いであろう。勿論、横浜市民を代表させるには、各区の人口によって回答に重み付けをせねばならぬが、本報告書ではそこまでは手を加えていない。

3-2 回答者が住んでいる用途地域

回答者の用途地域別人口構成を横浜市民と比較し図3-4に示す。横浜市民のデータは“横浜市の市街化動向—メッシュ分析を中心に—”（昭和63年3月）からのもので、少々古いが現況と大きな差は無いと思える。図中の「調整」はいわゆる用途地域の名ではなく、市街化を阻み自然を残すことを目的とした市街化調整区域を意味する。市街化を前提とした用途地域を包含する市街化区域に対比される言葉であるが、本報告書ではこの調整区域を一つの用途地域のように扱う。何れにしても、

回答者の用途地域分布はほぼ完全に横浜市民を代表している。回答者の内、第1種住居専用地域（1種と略記）に492名、第2種住居専用地域（2種）に238名、そして住居地域（住居）に262名が住んでおり、これら三種の住居系の人々が回答者1240名の約80%を占めている。従って各回答における全体的な傾向には、住居系の人々の意見が強く反映されている。

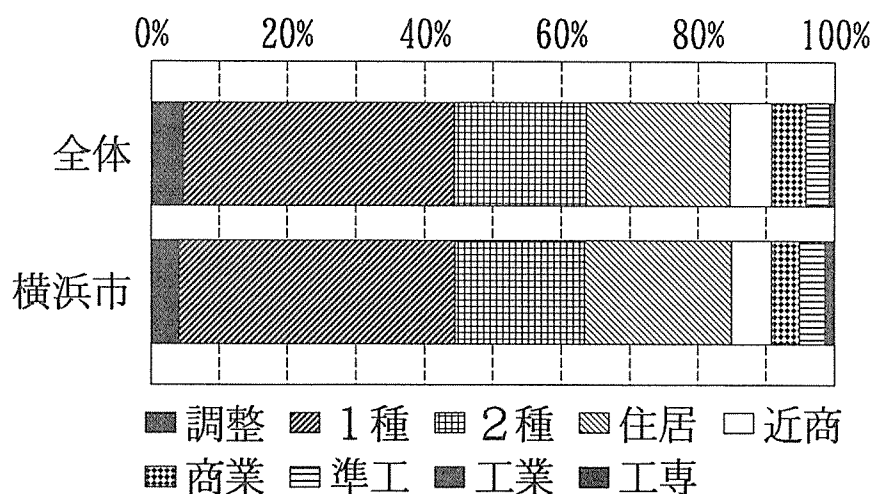


図3-4 用途地域別人口構成比較

図3-5に回答者の用途地域を年代別に示す。商業地域で12~19歳の若者が少ないことと準工業地域（準工）で20代の人間が少なめであることが全体の傾向と異なる。また工業地域には9人が、工業専用地域には（本来、人は住めないが）たった1人が住んでいるに過ぎず、以下、用途地域で結果を整理する場合には、これら両地域を種々の分析対象から除外する。なお、近商は近隣商業地域の略である。

用途地域とは別に、回答者が彼らの居住地域を自らどのような地域と意識しているかが図3-6である。ここに示された地域は調査票に用意されたものである。住居地域の人約70%、2種の人約80%及び1種の人約90%が住居系と回答している。調整では55%が住居系とし、24%が田園・郊外系と答えている。商業系と回答した人々は近商と商業で各々15~20%程度で他と比較して大きめであるが、共に50%以上は住・商混在系としている。

全体として70%が住居系と答え、17%が商業系または住・商混在系と答えており、用途地域における住居系80%（1、2種住専と住居の地域に住む人々）に比し回答者の普段の生活における実感を反映していると思われる。

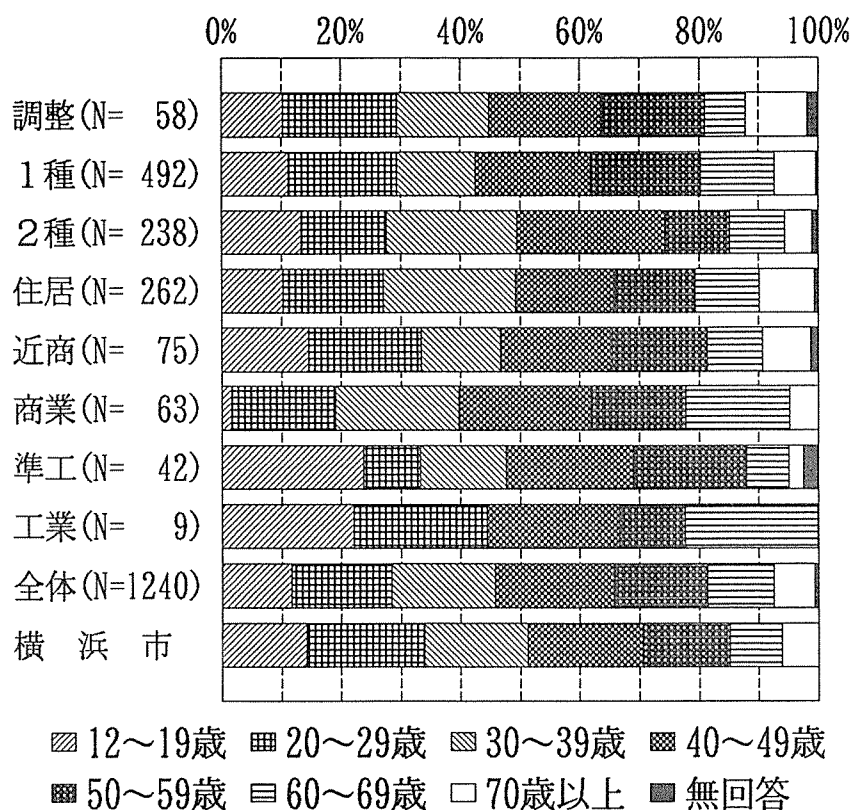


図3-5 年代構成（用途地域別）

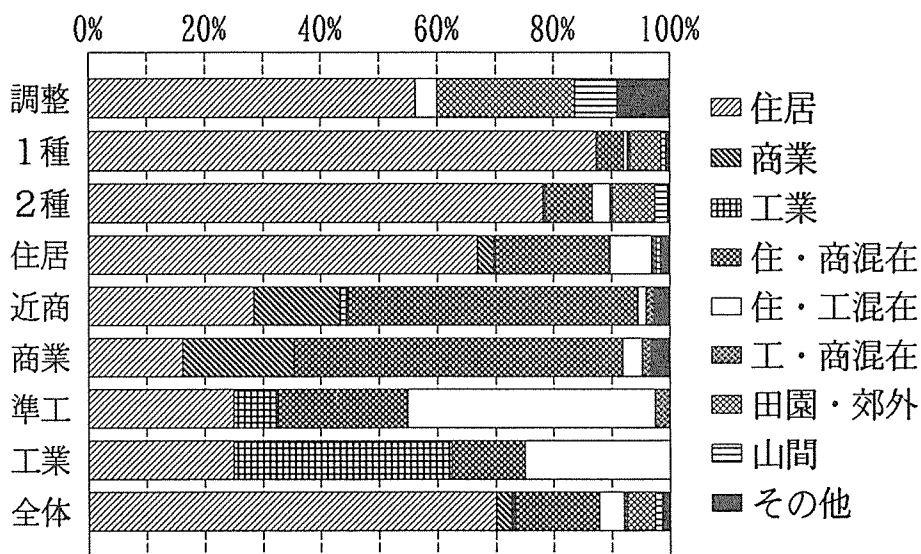


図3-6 用途地域と回答者の意識する居住地域

3-3 家の近所の施設

音源として自宅近辺に何が存在するかを把握するために、歩いて2～3分以内の家の近くにどのような施設が存在するかを複数回答で尋ねた結果が図3-7である。

多い施設としては50%を超える「バス通り」と「駐車場」であり、「鉄道」と「工場」は20%未満と少ない。公園が約70%を示し、意外な感があるが必ずしも施設の整ったものではなく、住区内によく在る幼児を遊ばせる様ないわゆる近隣公園的な物を多く含むと思われる。

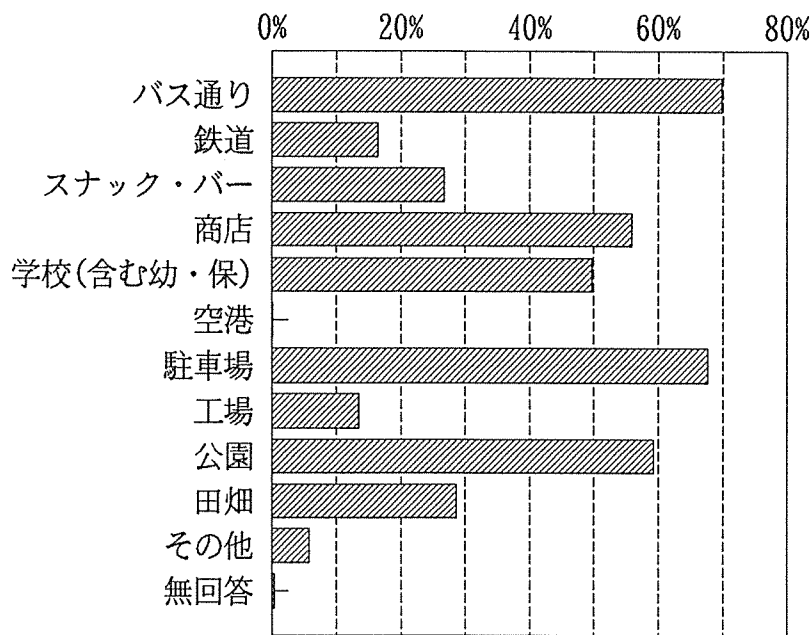


図 3-7 家の近くの施設等(複数回答)

3-4 現在地での居住年数

図 3-8 に現在地での居住年数を示す。回答者の約28%が20年以上、26%が10～20年住んでおり、両者で半数を超す。また5年未満が4人に1人という状況である。

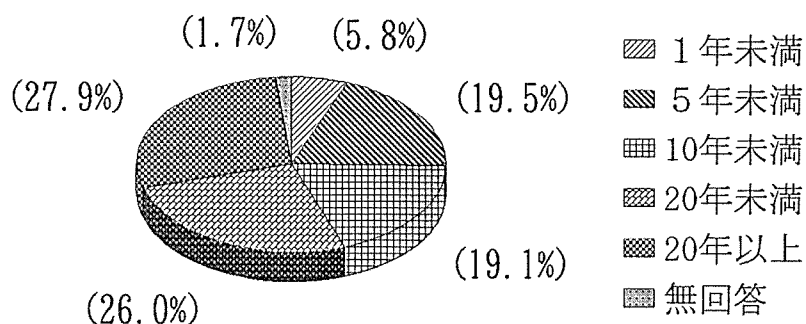


図 3-8 現在地での居住年数

3-5 住居形態

回答者の住居は半数以上が一戸建てであり、30%以上が3階建て以上の集合住宅となっている。つまり回答者の殆どがこの2種類の住居で生活している（図3-9）。

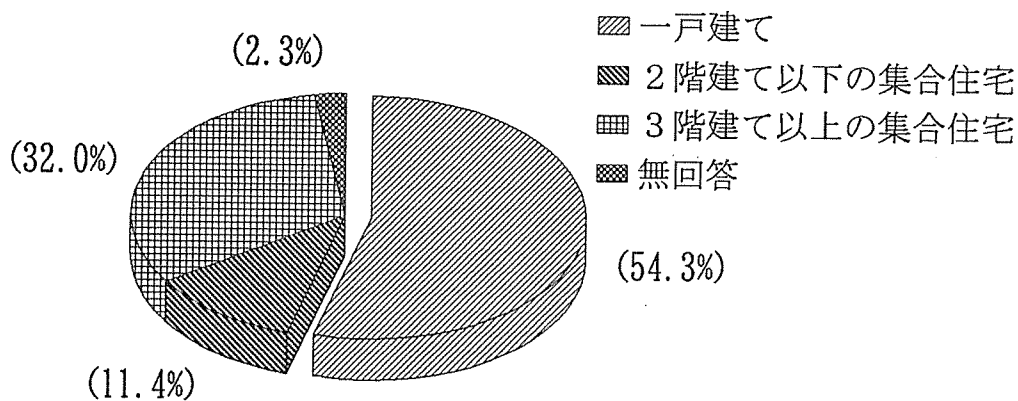


図3-9 住居形態

3-6 家族人数

図3-10に回答者を含めた家族人数を示す。家族人数は4人が最も多く33%、次いで3人の21%、この両者で50%を超える。2人と5人がそれぞれ15%であり、核家族化が見て取れる。

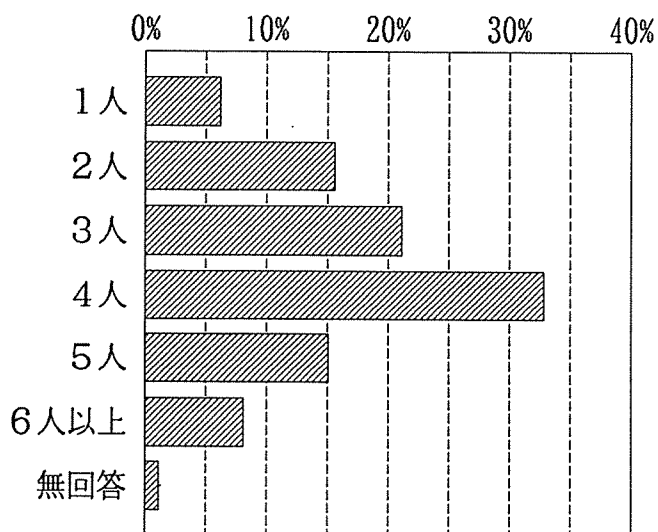


図3-10 家族人数

3-7 普段家で過ごす時間

回答者が普段家で過ごす時間を図3-11に示す。最も多いのは半日家にいる者で30%強であるが、半日以上家で過ごす者は4人の内3人である。また、8時間しか家にいない者が約20%となっている。

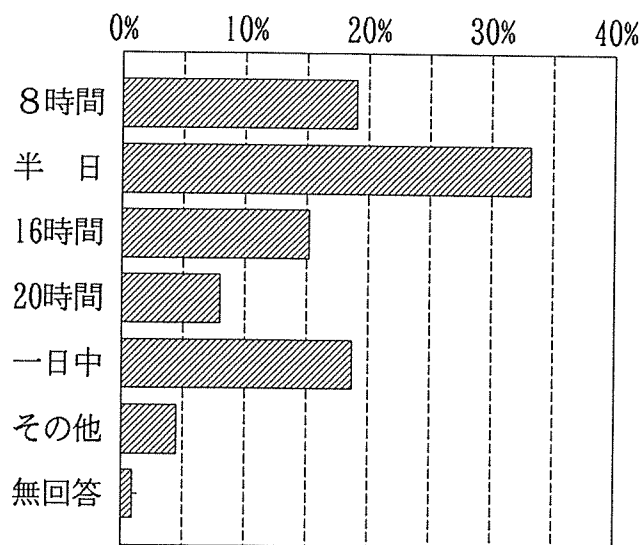


図3-11 普段家にいる時間

3-8 平均的回答者

回答者の年代構成はほぼ横浜市のそれに等しく、住居専用地域か住居地域といったいわゆる住居系地域に建てられた戸建て住宅か高層住宅に、回答者を含め家族3～4人で住んでおり、10年以上現在地に住み続けている。